

国語

地域単元を通して問題解決能力を育む書くことの学習**- 企画書づくりにおける学習プロセスを踏まえた個別支援 -**長生村立八積小学校教諭（前茂原市立東郷小学校教諭） おおたわ ひろこ 太田和 紘子

予測困難な時代を生き抜く児童にとって、問題解決能力を身に付けていくことが求められる。それらに対応するために、①学習プロセスを通して問題解決能力を磨き、効果的に言語操作して書く力を育成すること、②学習プロセスに即した支援と学習形態の工夫を通して、個別最適な学びを充実させること、③地域教材を扱い書くことを通して、地域の問題を自分事として捉え、深く関わろうとすること、の三点を視点とし、地域を教材として第6学年を対象に書くことの研究を行った。これらの方法が、地域への理解を深め、問題解決能力を磨き、言語操作をして書くことの力を高めるために有効であることがわかった。この研究を地域の教育研修会等で紹介し、多くの先生方にご活用いただきたいと考える。

社会科

**児童の社会的な見方・考え方を働かせ、
地域と産業を往還する力を育てる社会科指導****- 特殊性と共通性から異なる産業を関連付けた探究学習を通して -**旭市立鶴巻小学校教諭（前干潟小学校教諭） えんどう まなぶ 遠藤 学

現代社会において見られる産業間の関わりを教材とした産業学習を行いたいと考え、研究を始めた。本研究では小学校第5学年社会科の産業学習の単元において、地域学習と産業学習を組み合わせた単元開発を行い、児童が個人レベルではなく社会レベルで産業を捉えることができるようになることを目指した。

検証授業では、産業従事者の工夫や努力として、旭市における農業・畜産業・工業の産業間の連携を教材に学習を行った。その結果、児童は産業を盛んにする要因や利益追求のあり方など、産業に関する概念的知識を身につけることができた。今後は、どの市でも置き換えることができる地域の産業間の連携を扱った産業学習単元を開発していきたい。

社会科

**歴史的思考力を育み、
現代社会へといかす社会科学習の在り方****- 戦後の高度経済成長の転換点となった水俣病の学習を通して -**南房総市立白浜中学校教諭 おぐら ともひろ 小倉 智浩

「なぜ歴史を学ぶのか。」「歴史で学んだことを、どのようにいかすのか。」等、歴史を学ぶ意義や歴史の活用方法を理解している生徒が少ないという実態が、本研究を始める動機付けとなった。そこで、中学校第3学年社会科、歴史的分野のまとめ学習「歴史に学び、未来へと生かそう」において、水俣病を教材化し、歴史の教訓を現代社会の課題解決にいかす単元開発をした。それと同時に、歴史学習で必要とされている「歴史的思考力」を育成する学習方法についても研究を進めた。本研究成果として、生徒は歴史を学ぶ意義を見出したり、多様な価値判断をしたりすることができた。今後は、日々の授業実践や社会科の研修会等で、本成果を広めていきたいと思う。

理科

中学校3年「仕事とエネルギー」の学習における 深い理解を生み出す授業づくり

成田市立公津の杜中学校教諭（前成田中学校教諭） はやし ひろき 林 宏樹

千葉県公立高校入試では、令和2年度から2年連続で物理分野の正答率が最低であった。そこで物理分野における深い理解を得るため「仕事とエネルギー」の授業において、実験キットを用いた“斜面を転がる鉄球のコース作り活動”を取り入れた補充授業を行い、効果を検証した。その結果、力学的エネルギーの変化に着目した説明ができるようになった生徒が増加し、授業後に実施した調査問題では正答率が大きく上昇した。これらから、生徒自身が試行錯誤できる実験を取り入れることで、生徒の「深い理解」の実現に繋がることが分かった。今後は、生徒が自ら試行錯誤できる実験をどの授業に取り入れることが効果的かを研究し、“深い理解を生み出す授業”を広めていきたい。

体育科

児童が素早く走りだすことができるリレー学習の研究 -バトンパス時におけるスタンディングスタートの姿勢分析をもとに-

市原市立青葉台小学校教諭（前木更津市立南清小学校教諭） の も と りょうま 野本 竜馬

バトンパス時において、児童が素早く走りだすことができるスタート姿勢及び、これを身に付けるための指導法を明らかにしたいと考え、第6学年を対象としたパワーポジションを追求していく「短距離走・リレー」の実践を行い、姿勢分析を行った。その結果、目標としていた全員のリレータイムが向上した。その上で、全身前傾及び上体前傾に有意な差が見られ、上位群のデータをもとにスタート姿勢の指標を示すことができた。また、前傾を視覚的に把握できる教具及び、走りだしの判断を易しくした教材は、バトンパス時においても素早く走りだす姿勢を身に付けるための有効な手立てとなることがわかった。今後は、前傾角度以外の他の要因からも走りだしの研究を進め、指導の具体化を図りたい。

体育科

運動の生活化につながる体づくり運動の学び方 -デジタルログを用いた自己調整学習を通して-

富津市立天羽小学校教諭 なかの きょうへい 仲野 恭平

本研究では、自己の体力や運動習慣の数値化と可視化に着目し、「運動の生活化」を実現するため、デジタルログを用いた自己調整学習を行った。体づくり運動の学習で「遊びの創作」、授業外で運動習慣の「ログ」をとる活動に取り組んだ。その結果、児童自ら運動習慣を調整し、活動量の向上が認められた。また、体の調整力を向上させるための知識、運動技能の向上も見られた。成果として、活動量や能力の可視化によってメタ認知が促され、学びが調整されたこと、更に、授業内外問わず進んで運動遊びに取り組み、技能や運動有能感が向上したことが挙げられる。今後、長期的な取り組み方の検討と、他領域での有効性や汎用性を探り、研修会等で報告し広めていきたい。

総合的な学習の時間

地域の課題に目を向け、 地域のために行動できる児童の育成 -協働的な学びを取り入れたESDの推進を通して-

鴨川市立田原小学校教諭（前天津小湊小学校教諭） たつま 辰馬 もとつぐ 基倫

前任校のある鴨川市天津小湊地区は、過疎地域に指定されており、「持続可能な社会」として在り続けることができるかどうか問われている地域である。そこで、本研究では、地域の課題に目を向け、地域のために行動できる児童の育成を目指して、個人の能力の発揮による協働的な学びを取り入れたESDを推進した。その結果、児童は地域に対する思いを育んだり、地域の実態を再認識したりすることができた。また、地域の課題に目を向け、地域のために考え、行動しようとする意欲や態度が身に付いた。今後も個人の能力の発揮による協働的な学びを取り入れたESDを推進し、課題を自分事として捉え、その解決に向けて自ら行動を起こす力を育むために励んでいく。

生徒指導

集団で自己肯定感を高める、積極的な生徒指導の在り方 -総合的な学習の時間における地域交流学習を通して-

県教育庁南房総教育事務所指導主事（前木更津市立八幡台小学校教諭） もりやま 森山 すすむ 晋

日本の若者は、諸外国と比べ、自己肯定感が極めて低いことが様々な調査結果から指摘されている。予測困難な未来に向けて、子供たちがよりよい自己実現をしていくために、自己肯定感は土台になると考えた。そして、生徒指導の視点から、自己肯定感を高める実践をしたいと考え、本研究に至った。検証授業は、総合的な学習の時間で小学6年生を対象に実施した。単元名は「みんなでチャレンジ！地域貢献！」で、地域の課題解決に向けて、児童と地域の人々が協働する実践である。検証授業の成果として得られた「共有体験」「視野の広がり」「他者から認められる体験」「達成感」「自己効力感」の視点を活かし、他の単元や教科での授業を開発・実践・発信していきたいと考えている。

現代的教育課題

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図るための ICT機器活用ができる教員の育成と研修の実践的研究 -デジタルログを用いた自己調整学習を通して-

我孫子市立湖北台東小学校教諭 かねこ 金子 たくろう 拓郎

教員が「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を目的としたICT機器活用を行えるようになるための情報共有や研修体制づくりの開発、提案をした。アンケート調査とインタビューでそれぞれの教員が抱える課題を明らかにし、個別の不安やニーズへの対応を検討・実践した。教員のICT機器活用状況を数値化し、イノベーター理論により教員を五つのグループに分類し、分類されたカテゴリーの特性に合わせた研修を行うことで、教員同士で実践例や相談内容を共有しやすい状況づくりを行った。その結果、児童と教員共に「個別最適な学び」と「協働的な学び」の授業場面でのICT機器活用頻度が向上した。今後は校内だけでなく市や県に広げていけるような情報共有につなげていきたい。

現代的教育課題

オンラインを活用した 探究的な学びを深める単元モデルの開発 -外部人材による学習支援の取組を通して-

市原市教育センター指導主事（前牧園小学校教諭） ^{あくつ ひろたか} 阿久津 大貴

現在、これまでにない速さで社会は変化している。これからの学校は、そのような社会を生きていく子供たちに必要な資質・能力を育むため、「学校ならではの価値ある経験」を提供することが求められている。そこで私は、小学校高学年を対象に、「オンラインを活用して外部人材と高頻度かつ双方向のかかわりをもつことで、探究的な学びを深めることのできる単元モデルの開発」を行った。単元は、主にプロジェクト学習の考えを生かして、外部人材と協働して地域の歴史・文化の魅力を動画にまとめる活動を軸に構成した。学習のゴールは、地域の博物館公式YouTubeアカウントでの動画発信である。オンラインでの外部人材活用モデルの一つとして、参考としていただければ幸いである。

特別支援教育

特別支援学校（知的障害）における 保健体育に関する実践研究

-生涯スポーツの基礎を培うアダプテッド・スポーツと授業の関連と効果-

県立湖北特別支援学校教諭 ^{うしじま だいご} 牛島 大悟

本研究では、生涯スポーツに向けた取組やアダプテッド・スポーツの必要性について明らかにするために、特別支援学校（知的障害）高等部の教職員に向けて調査を行った。また、アダプテッドの視点を整理して授業実践を行った。

その結果、教職員の生涯スポーツに向けた取組や認識が明らかとなり、授業実践においては生徒を対象とした授業前後の調査より、運動意欲やアダプテッドの視点の必要性についての変容が見られた。また、教職員のインタビューから、生涯スポーツにより目を向けた取組の重要性が示唆された。実践や情報については、「アダプテッド・スポーツ教材・教具アーカイブ」にまとめたものを活用していきたい。

企業等派遣研修

企業の経営理念を学校経営に生かす

県立夷隅特別支援学校校長（前富里特別支援学校教頭・前大網白里特別支援学校教頭） ^{おちあい おさむ} 落合 修

学校は、新型コロナウイルス感染症対策や働き方改革、組織マネジメント、不登校など様々な問題に直面し、対応や改革を迫られている。派遣先の「株式会社三日月（龍宮城スパホテル三日月）」は、コロナ禍でありながら「お客様ファースト」であり続けるためのノウハウを持ち、企業努力を重ねながらホテル業務を継続している。私はホテル各部署での研修を通して、企業の経営理念やマネジメント、お客様への対応、連携等について学んだ。ホテルのホスピタリティ（おもてなし）の精神に基づいた経営は、「すべては子どもたちのために」という学校経営につながる。「明るく元気に楽しく学べる学校」をつくるために、研修で学んだ企業理念等を生かし、チーム学校で対応していく。

千葉大学大学院長期研修で学んだこと

袖ヶ浦市立根形中学校教諭（前蔵波中学校教諭）^{のむら}野村 ^{ゆみこ}裕美子



1 研究テーマ

千葉大学大学院（修士課程）派遣長期研修の機会をいただき、千葉大学大学院教育学研究科理科教育の山下修一教授の研究室で、令和2年度から2年間研究を行った。

私の研究は、理科の地球領域で地域教材を活用した教材開発である。山下研究室では、コア知識と、発展的な課題の読み物教材の活用研究を行っている。「コア知識」とは、山下教授が提唱したもので「幅広い現象に適用できる確固とした知識で、一貫した説明がしやすいように操作を加えたもの」である。読み物教材とは、既習内容とコア知識を組み合わせることで発展的な課題を解決できる手助けとなるものである。読み物をとおして学習を振り返ると共に、発展的な課題について情報を整理し、理解を深め、科学的に説明できるようになる。

理科の地球領域では他の領域と比べてコア知識と読み物教材を取り入れた実践は少ない。そこで私は、地球領域の地域教材として、天然ガスに着目した。千葉県には水溶性天然ガスの産地である「南関東ガス田」が存在し、その産出量は日本最大級である。この地域教材を生かし、中学校第1学年の地層単元で実践を行った。コア知識を活用した授業を行い、単元終了後に読み物教材を活用し発展的な課題について考える授業を研究した。

2 在籍校での授業実践とコア知識

本実践では、三つのコア知識を柱とした授業を実践し、発展的な課題として読み物教材を用いた。生徒の理解度は生徒の記述をテキストマイニングして検証した。

一つ目は、「堆積は水の中」である。生徒は、流水のはたらきと堆積物の粒の大きさによる堆積の順番について演示実験を行い、水の運搬作用の後、堆積することを確認した。



図 立体柱状図モデル

二つ目は、「地層はつながっている」である。地層の広がりを考える立体柱状図モデル（図）を開発し、それを用いて、空白部分の柱状図を自分たちで予想を立てた。そうすることで、コア知識が、生徒の実感を伴った理解となった。

三つ目は、「大地の変動はプレートの動きによって起こる」である。断層や褶曲のモデル実験により、大地に力が加わることによって大地が変化するという理解をした。

三つのコア知識を身につけた生徒は、地球領域特有の時間的・空間的な視点を持つことができた。学習後に読み物教材を読み、千葉県南東部で天然ガスが採掘できる理由を科学的に説明することができるようになった。

3 今後の展望

現在、東京学芸大学連合大学院に進学し、研究を進めている。昨年度、第2学年の気象単元で、関東地方で雪が降るのはなぜかという発展的な課題の読み物教材を作成し、実践を行った。今年度は、第3学年、地球と宇宙の単元の読み物教材を作成している。研究と教育という両方の視点を持ちながら、授業研究に取り組み、生徒や地域のために、理科教育を推進していけるよう努力を続けたい。

学校教育における情動の探究

富津市立富津小学校教諭 いそべ 礒部 みつやす 光泰



本研究の目的は、「情動」(affect)の学校教育での働きについて、ブラジルの教育実践家パウロ・フレイレ、および彼から影響を受けた教育論を手がかりにして、分析することである。「情動」とは、今現在、様々な分野で議論されている概念である。また、OECDが『ラーニング・コンパス2030』で提唱した「エージェンシー」——この概念のルーツの一人がフレイレである——とも関連が深い。

先行研究によると、「情動」は「仲間の頑張りに思わず声が出た」といったような、五感を通じて心が動かされたり、意図せず身体が反応したりする体験を引き起こすものとされている。また、身体が醸し出すエネルギーともされる。尚、その情動の体験が、時間の経過と共に言葉で整理できるようになると、「感動した」や「驚いた」という「感情」(emotion)として経験され、価値判断と密接に関わるようになる。

本研究では、学校教育での情動の働きについて、以下の2点が特に重要であると提示する。1点目は、学校での情動体験が、子供たちの感情を豊かにするという点である。現代のデジタル社会では、我々は自分の見たい事・知りたい事を、簡単に体験・経験できるようになった。言葉を変えれば、これは情報メディアによって、感情経験を限定的にされているとも言える。閲覧履歴やリアル動画など、アルゴリズムによって“オススメされる情報”は、いつの間にか我々の選択肢を減らし、“居心地のよい”世界観を作り上げる。“居心地のよい”情報だけで構成された世界の中では、その他の情報を気づかないうちに遮断し、そ

の結果、感情は限定されたものになっていく。また、再生数を稼ぐためだけに作成された過激なコンテンツは、目にした者の情動を強烈に触発し、極端な感情を持つようにしていく。その現状に対して、現代の学校教育は、これまで以上に、子供たちの感情を豊かにする事が求められる。学校は、様々な人や物事と出会う空間である。その出会いは、子供たちの情動を多様な仕方で触発する。さらに、直視すべき世界の現実——貧困や自然災害、戦争や紛争、その過酷な環境にいる人々の生活史等を、学校教育の中で具体的に取り上げ、目を向ける事は情動的な学びとなる。情動の触発の多様さが、子供たちの感情をより一層豊かなものにしていくのである。

2点目は、子供たちと過ごす“ありふれた日常”の中に、既に情動的な意味があるという点である。時間や費用の最適な効果が求められる現在、学校教育には「どうしても効率化・可視化できない部分」が存在する。私たちは、何気ない会話や、見過ごせない出来事への指導、1回の授業へかける思い等により、子供たちと情動的な関係を築いている。その関係は、悩んだり傷ついたりすることの連続でもある。それでも尚、粘り強く関わろうとする事が、ありふれた日常の情動体験であり、それこそが子供たちの感情を豊かにし、健全な精神発達に欠かせない実践なのである。

本研究で示した事は、即時的効果を期待することが難しいかもしれない。しかし、その難しさに直面しながらも、子供たちと向き合い続ける学校や教師の存在意義、価値、そしてその尊さについて今後も研究していく。